

## U-16 静岡県選抜 第66回山口国体「優勝」までの道のり

【報告者】武田直隆（U-16 静岡選抜コーチ、大井川高校）

■報告対象者：3種2種指導者

■目的：トレセンを軸とした静岡の選手育成の大きな到達点のひとつとしてのU-16 国体優勝の道筋から大会に向けたチーム作りや選手育成の気付きを得てもらう。

■報告

1. 東海国体まで

2010年12月のJr合宿からU-16の活動がスタートした。3月にはモロッコ・フランス遠征を経験し、球際の厳しさや戦うこと、日常を変えていくことを感じ取った。甲信越静大会は震災の影響で中止となった。2011年6月から前期リーグ、8月からミニ国体の予選リーグを戦い、東海地区2位で山口国体の切符を手に入れた。

## ▶前期リーグ

6月12日	V S 愛知	0-5	●	
6月26日	V S 岐阜	3-2	○	得点：田口2 中野
7月10日	V S 三重	4-2	○	得点：佐藤飛 北川2 中野

## ▶ミニ国体

8月12日	V S 岐阜	2-1	○	得点：北川 梅村
8月13日	V S 三重	3-4	●	得点：山本 北川2
8月14日	V S 愛知	1-0	○	得点：北川

## ▶総括

愛知戦での0-5をはじめ、前期の三重戦、ミニ国体の愛知戦を除いては、全て先制点を奪われる厳しい試合展開が続いた。この6戦を通じて転機となったのが最終戦の愛知戦であった。負ければ4年連続の出場が途切れる可能性があり、プレッシャーの懸る試合の中で、1-0で勝利することができた。前日の夜には選手同士でミーティングを行い、廿日岩監督のところへ守備の確認に来るなど今までにはない行動があった。その成果もあり、チームが一体となって戦うことができた。

2. 山口国体本大会前の準備

山口国体を決めた後、浜松開誠館高校、U-16千葉県選抜、藤枝東高校とのトレーニングマッチを行った。チームコンセプトをミーティングで確認し、守備のベース ※(B)の徹底と ※(A)にもチャレンジした。また、終了間際（負けている状況）のパターンにもトライした。延長、PK戦のシュミレーションも行った。千葉戦では、相手の圧力にこちらが受けて立ってしまい、0-2で敗戦する結果となってしまった。この試合から「戦う」こと「負けたら終わり」であることを選手、スタッフで改めて意識することができた。

※守備の組織・・・(A) 相手陣内からプレス (B) 中盤のゾーンからプレス

## ▶スケジュール

29日（木）に山口県へ向けてバスで移動した。約12時間  
 30日（金）クレーグラウンドにてトレーニング  
 内容：2対2 チャレンジ&カバーの確認  
 シュート（GKと1対1のシチュエーション）

クロクからシュート (ニアサイドを意識して) (スローインからL字で崩す)  
 DFのビルドアップから前線へフィード ~ クロス ~ シュート  
 PK  
 MS (松柴氏) スクワット、腹筋、インターバル走10分

※5連戦を意識した補強トレーニング

1日(土) 高川学園G (人工芝)

内容: ポゼッション (デイリーメニュー)

シュート クロス~シュート

CK (攻撃)

FK (直接)

移動: 選手、スタッフは総合開会式に参加

17:00~公園でランニング12分 4チームにてリレー (スタッフも参加)

#### ▶総括

トレーニングでは、デイリーメニューに加えて、ゲームシチュエーションとなるトレーニングを行った。裏への突破がこのチームの特徴であるため、GKと1対1、サイドからのクロスを行った。クロスの入り方ではニアに入る選手ことに課題があったので、入るポイントの確認(3カ所)と、立ち上がりのDFラインの配球(シンプルに裏へ)をチーム全体で共有させた。結果的に大会では、裏へのシンプルな配球やクロス(CKも含む)から今大会では得点をあげることができた。今までの積み重ねとチームの特徴を生かすこと、トレーニングマッチからの課題を修正することの重要性を再確認することとなった。また、5連戦を想定したコンディショニングにも配慮したことで、山となる3試合目や決勝戦においてもコンディショニング的な問題は少なかったと感じている。

### 3. 大会結果

		前半	後半	合計	得点者
1回戦	VS 沖縄	(2-0)	(1-0)	3-0	中野2 金原
2回戦	VS 大分	(0-0)	(1-0)	1-0	中野
準々決勝	VS 宮崎	(2-0)	(2-0)	4-0	中野 田口 土居2
準決勝	VS 大阪	(2-0)	(1-1)	3-1	中野 北川 佐藤飛
決勝	VS 千葉	(前後半0-0延長0-0)		0-0	※規定により両県優勝

※7年ぶり20回目の優勝 U-18大会からU-16大会になっては初優勝

### 4. チームコンセプト

頂上へ!! 「山は高ければ高いほど、頂上から見下ろす景色は素晴らしい」

◎SHIZUOKAの誇りと責任・・・静岡県の代表16名

・19/28/42

◎チームの勝利の為に献身的に戦う・・・トーナメント、勝たなければ終わり

・「勝利」が全てにおいて優先される

◎アグレッシブなプレー・・・愛知戦をベースに積み上げていく

・タフに戦う(メンタル面、フィジカル面)

◎コミュニケーション・・・前向きな声、それに応える声

・団結し、全てのメンバーの力を結集させる

#### ▶戦術のコンセプト

〈守備〉

○積極的にボールを奪いに行く※球際を厳しく、1VS1に勝つ

・プレッシャーの基本ライン

☆相手陣内で失った直後、相手の状況が悪い時、点が欲しい時は・・・A

☆基本（ベース）・・・B

・コンパクト（Gapを閉める 前後 左右 プレスバック）

○ゴールを守る

・Box付近でのチャレンジ&カバー

〈攻撃〉

○ゴールを目指す

・DFライン裏への動きだし（FW、サイド、2列目）

・シンプルにスペースへ配球する（選択肢の1つ）

〈切り替え〉

○リスクマネージメント・・・GK、CB、ボランチを中心に シュートで終わる

・悪い失い方をしない

○素早く奪い返す・・・相手陣内で奪い返せば→チャンス

・ボールライン後方へ素早く戻る

〈セットプレー〉

・CKニアに2枚 ファーに3枚 ゴールに密集 ショートCK

・スローイン（L字） ブルガリア（FK）

#### 4. 成果と課題

□成果

- ・これまでのベスト8の壁を破り、7ぶりの国体優勝ができた。（千葉県との両県優勝）  
20/29/42 優勝回数/ファイナル進出数/国体出場回数（連続）
- ・前半や後半の早い時間帯での得点（先制点）により、落ち着いてゲームを運ぶことができ、選手交代を有効に使うことができた。そのため、5試合で怪我人を出すことなく戦うことができた。3試合目では初先発の選手を起用し、期待に応えてくれた。（4-0で宮崎県に勝利）
- ・松柴トレーナーが5連戦を見据えた前々日からのトレーニング（筋トレ、インターバル走）や試合後のケア、食事、就寝の確認、試合前のW-U P時のメンタルコントロールで16名すべての選手がメンタルもフィジカルも充実した状態で試合に臨めた。また、暑さ対策（冷却タオル） 寒さ対策（ホットパック）等も万全であった。
- ・試合前、監督のミーティング前にベンチ横でショートダッシュを行い、立ち上がりからテンションを上げて試合に入ることができた。
- ・選手個人とチームの特徴（裏への抜け出し、スピード、ドリブル突破）が得点場面で機能した。
- ・ゴール前での選択肢が増えたことにより、（パス or ドリブル）得点のチャンスを生み出すことができた。
- ・中盤の守備ではブロックを形成し、サイドや相手ボランチのところで奪う場面が増えたのは成果である。
- ・GK高木和の安定感。（ハイボールに対して積極的に処理することができた）
- ・1トップ 中野のスピードと決定力。（4試合連続ゴール 大会5得点）
- ・sub選手の人間性。（早生まれの石井、成田の存在）
- ・ミーティングでのキーワード  
「今を戦えない者に、明日や未来を語る資格はない」  
「我々のベストゲームは次のゲームだ」 を通じて、今を大切にすること、全力を出し切ることに働きかけることで戦う集団へと導けたこと。
- ・試合を重ねるごとにチームに一体感、団結が芽生え、戦えるチームへと変わった。（雰囲気）
  - ・スカウティングにより、相手チームの特徴、特徴のある選手をミーティングで共有することでイメージと対策をもってゲームに臨むことができた。（試合前日の夜のミーティング）U

ー16年代では、チームとしての完成度が低いため、相手の特徴のある選手や攻撃の基点を抑えればある程度は戦えてしまう。

- ・個別のアドバイスやW-u pでのTR（例1対1の対応やCKの守備）でフィードバックできた。
- ・モチベーションビデオによって、ゲームやチームの様子を振り返ることでチームに一体感と責任感や気持ちが高まった。（試合当日のホテルでのミーティング）
- ・スタッフ陣の役割分担 監督→全体への指示、コーチ→セットプレー、相手チームとのマッチアップ、トレーナー→SUB選手のW-UP 等がスムーズにできたこと。

#### □課題

- ・2点リードした後のゲームの運び方に課題があった。ゲームを落ち着かせるようなポゼッションやGKからのビルドアップができなかった。パス&サポートや2タッチでのシンプルにボールを動かせるようにすることが課題。（味方・相手・スペース・ゴール方向）を観ておくこと。
- ・ほとんどがGKからのキックでスタートするため5分5分の空中戦になってしまった。GKのスローイングやキックからのビルドアップが静岡県の課題である。ビルドダウンしてしまう。
- ・相手の背後を突く狙いは優先順位として悪くはないが、1トップやサイドで基点（時間）をつくり出すことができなかった。そのため、相手にボールを渡してしまい、試合に勝っているにもかかわらず相手に主導権を渡す場面が多々見られた。
- ・バイタルエリアの守備では、相手のサイドMFが内側へカットインしてきたときのチャレンジ&カバー（横のスライド）とボランチの守備が甘くなり、DFラインが下がりすぎてしまう場面が何度かあった。（大阪との失点シーン）
- ・狭い局面から広い局面へのサイドチェンジが少なかった。
- ・直接狙えないFKの攻撃パターンを細かくやっておくべきであった。決勝戦ではスタッフ陣のイメージと選手のイメージにズレがあった。決勝だけを考えれば、得点チャンスはセットプレーにあった。

#### 5. まとめ

大会を通して試合ごとに選手は自信を持ってプレーできるようになっていった。これまでは先制点を奪われることが多かったが、本大会では立ち上がりで得点を奪う展開が多く、精神的に余裕を持ってプレーできたことが優勝できた勝因の一つであると考えている。もちろん選手、スタッフに一体感や団結があったことは言うまでもないが、東海予選で苦しんだことが嘘のように本大会ではスムーズに試合を運ぶことができた。試合の立ち上がりの入り方を「シンプルに裏へ、リスクを冒さないこと」を強調し、それを実践し結果的に得点に結びついたことが優勝に繋がったと感じている。

サッカーの質の話に戻すとGKを含めたビルドアップや中盤でのポゼッション、前線で時間を作ることでゲーム展開に応じた試合の進め方などが静岡県の課題であったと思う。2回戦で対戦した大分県は先発の半数近くが中学3年生であったが、受け手と出し手がタイミング良くパス交換する中で、数的優位を作り出していた。システムも4-2-4-0のような中央のCFが下がり、両サイドにFWがいるような形で、静岡のCDFにマークがない状況でミスマッチを作られてしまった。大分県の選手育成やチーム作りは参考にすべき点が多くあったように思う。

最後に長期間にわたる多くの関係者のご支援とご協力があった、今回7年ぶりの優勝ができました。本当にありがとうございました。